

査読についての観点

はじめに

査読の基準とその評価内容あわせて投稿種別ごとの評価適用の考え方を示し、査読者はそれらに基づいて査読を行うことが大切である。

投稿者が投稿原稿の種別に応じてそれらを満たすよう投稿するためのものである。互いのガイドラインとなるべくここに示す。

投稿種別

A 原著論文

学術上および技術上でこれまでにない新しい発見を記述したもの。学術上および技術上これまでにない新しい研究成果（これまでのことがらよりも一段進化した事柄）を記述したもの。学術上および技術上、世の中に対して非常に有効性・実用性があるものを記述したもの。上記それぞれの信頼性、妥当性、了解性のもとに記述したもの。

B 実践報告

様々な分野における調査あるいは実践結果の報告で、問題設定、手段や過程に新規性は十分なくとも、追試・意見・提案・討論なども含む結果から生じた課題や成果に、一定の有効性や信頼性が認められるもの。

C 総説

特定の問題・研究分野に関する内外の文献を網羅的に集めて分析・検討したもの。

D 研究ノート

学術上および技術上有効である新しい研究成果で、前記「原著論文」と比較すると、研究途上のため有効性や信頼性に劣るが、報告する意義が認められるもの。

評価項目

（ア）新規性（独創性）

既往の研究成果を踏まえたうえで、執筆内容が公知・既発表、又は既知のことからではないこと。ただし、既往の研究成果の要素の組み合わせにより新たな視点や機能・効果等が認められる場合は新規性ありと認める。

（イ）有効性（実用性）

執筆内容が社会全般（工学、教育、経済、諸々）の発展に十二分に役立つものであること。必ずしもシミュレーション結果、実験データ、統計的处理等による比較は必要としないが十分な論理性が必要。

（ウ）信頼性（正確性）

論旨に矛盾がなく、結論等を信頼する上での明確な根拠が示されていること。

(エ) 了解性

論旨が読者皆に理解できるようにわかりやすく記述されていること。

(オ) 体裁

論文作成要領に従ってタイトル、引用、構成、図表、注記、引用等は、適切に記載されているか。政策的、宣伝的、誹謗中傷的な表現など、問題のある表現はないか。

投稿種別と評価の在り方

	原著論文	研究ノート	実践報告	総説
新規性	必要。ただし有効性が極めて高い場合は、さほど高くなくともよい。	必要だが、原著論文ほど高くなくともよい。	さほど高くなくともよい。	類似の分野・対象についてほぼ同じ立場から論じたものが近年に公表されていなければよい。
有効性 および実用性	必要。ただし新規性が極めて高い場合は、さほど高くなくともよい。	必要だが、原著論文ほど高くなくともよい。	必要。	最も必要。当該分野の研究状況がバランスよくまとめられていること。
信頼性	必要だが、査読時には厳しすぎる判定をしないようにする。	前提から結論までの論旨が通っていればよい。未検討部分があっても、それが主要課題でなく、結論を変えるほどの重大な影響が予見されなければよい。	原著論文ほどの確実な根拠は必ずしも要求しない。	特定の事象や一方的な見方だけを紹介するものでないこと。
了解性	論旨の展開が十分理解しやすく、順序立てて明瞭に記述してあること。			
体裁	投稿規定に従って原稿が構成され、記述されていること。			

査読と判定

査読者の判定区分

- ① 掲載可
- ② 条件付掲載可
- ③ 要修正・再査読

①においては速やかに採録決定後の掲載に関しては速やかにホームページ上の「工学振興共立学会論文集」に常時記載される。

②および③の判定では、査読者は、掲載のための修正の条件（各評価項目に照らし合わせて、掲載には指摘した箇所についての修正が必要と認められる事項）と、参考意見（論文の質を向上させるための査読者の意見であり、修正が必須とまではいえない）とを、明確に区別して意見を記載すること。

- ④ 掲載不可

査読者は、各評価項目に照らし合わせて掲載不可と判定した理由を明記し、再投稿時の修正の条件と論文の質向上のための参考意見とを明確に区別して意見を記載すること。

査読要領

- ① 査読者は3名とする。査読者の氏名を著者に明かすことなく、著者の氏名を査読者には明かさないこととする。
- ② 研究や論文の価値は読者が判断するものであるから、査読者は執筆者の意見を最大限尊重し、大局的な観点に立ち、査読者の主観的な見解や主義主張、立場の違いにより、大幅な意見・修正を求めないものとする。
- ③ 査読者名は一切公表しない。
- ④ 再査読時には前回の査読事項に基づき修正された箇所についての査読を基本行うこと。前回までの査読時に指摘しなかった点についても再査読時に修正を求めてもかまわない。よい原稿とものになることを優先とする。
- ⑤ 査読者が感じた疑問や不明な点は「〇〇は××でしょうか？」のような疑問を修正の条件として示すのではなく質問事項として確認し原稿の了解性と信頼性を増すために「〇〇は××かどうかを再度検討してください。」のように修正の条件として明示すること。
- ⑥ 査読は原則として2回までとし、2回目以降の査読は論文の信頼性や了解性を増すための軽微な修正要求とすること。